
真夏の夜の出会い

緋咲 焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夏の夜の出逢い

【Nコード】

N5652C

【作者名】

緋咲 焰

【あらすじ】

夏休みも終わりに近付いた花火大会の夜。コナンは思いもかけない人物と出逢う。その出逢いは今後のコナンの運命を大きく左右するものだった。

1・夏の終わり

コナンが少年探偵団の面々といつもの如く阿笠博士の家で遊んで帰ってくる事務所には誰も居なく。

蘭からの書置きには、小五郎は麻雀の集まり、自分は部活で少し遅くなるとの旨が書かれていた。

そして、夕食に関しては『ポアロ』のマスターに言付けてあるとも暑い中、子供達に付き合って走り回り汗をかいたシャツを着替えてコナンは部屋を出る。

ポアロへと向かうべく階段を下り、店に入ろうとして毎年恒例となっている提無津川の河川敷での花火大会の張り紙を見つけ足を止めた。

そう言えば、と。1週間前に蘭と小五郎とで見に行くに約束をしたことを思い出す。

「もう夏休みも終わりか・・・」

花火大会が催されるのは夏休みの終わりも間近な8月の最終週の日曜日。

小学生の夏休みの宿題なんて、絵日記と朝顔の観察以外は初日に終わらせているので、夏休みが終わることに關しては困ることは無い。ただ、毎日がバカバカしいくらいに楽しかったのも事実で。

花火大会が終わってしまえば夏も終わりなのだ実感してしまいそうで、ほんの少しだけ名残惜しいような気もしていた。

「こんばんは」

「いらっしやい、コナン君」

ポアロの中へと入っていくと笑顔を浮かべた梓がコナンを迎え入れ

てくれる。

いつもの定位置へと座ると傍らに置かれたメニューへと手を伸ばした。

「ずいぶん遅くまで遊んでたんだね。もう少し早く来るかなって思ってたんだけど」

「あ、うん。元太達と遊ぶのに夢中になってたらこんな時間になっちゃった。蘭姉ちゃんには内緒しててね」

「了解」

本当は夢中になっていたのは元太達の方でコナンは付き合わされただけ。

すぐに飽きるだろうと高を括っていたのが間違い。

早々に用事があると言って帰った灰原の選択は正しかった。

「じゃあ、梓さん」

「決まった？」

「うん、オムライスとアイスコーヒーをお願いします」

「オムライスとアイスコーヒー、ね。コーヒーは食後で良い？」

「うん」

「すぐ出来ると思うから、もうちょっと待っててね」

「はい」

梓の言葉に良い子の返事を返すと笑顔で奥へと向かう彼女を見送る。彼女の姿が見えなくなったところでコナンはソファに深く身体を沈め小さく息を吐いた。

慣れたとは言え、たまに無性に子供を演じることに虚しさを感じていた。

そんな時、無性に彼に会いたくなる。

どんな姿でも己の存在を認めてくれる唯一無二の親友。

照れとプライドが邪魔をして本人を前にして素直に言うことは出来ないけれど。

コナンは本当に感謝していた。

「そう言えば、今回はアイツ東京に来なかったな・・・」

連休とあらば、いつもわざわざ大阪から出てくると言うのに。休みじゃなくても心配して来てくれた事もあった。

それなのに、夏休みと言う長い休みに来ないなんて。

うるさいくらいの大阪弁も久しく聞いていないことに気が付く。

「まあ、アイツだって忙しいんだろうけどさ、」

一言くらい、と零しそうになってコナンは思わず手で口を覆う。柄にも無く寂しいと思っているなんて。

夏の終わりを間近に感じて感傷的になっているのかもしれない。

コナンは口元に自嘲的な笑みを浮かべて首を振った。

「はっ、冗談じゃねえ」

自分と彼は対等の関係。

だからこそ自分は『自分』でいられる。

「どうかしたの、コナン君？」

「え、あ、梓さん！」

考えていたことが表情に出ていたらしく。

ふいに降ってきた声に顔を上げると、気遣わしげな表情を浮かべた梓がコナンを見ていた。

コナンは返答に困り苦笑いを浮かべて誤魔化すしかなかった。

「今、電話があつて。コナン君がいるなら代わって欲しいってこと
なんだけど……」

「僕に電話……？」

自分の知り合いなら直接携帯に掛けてくるはず、と考えて思い出す。
単に階下に来るだけだからと、コナンは先程着替えたときに携帯は
何の気もなしに事務所に置いて来てしまっていた。

「服部って名乗ってたけど、知り合い？」

「え、はっ……とり？」

「うん、関西弁の男の人」

「平次兄ちゃんだ！ありがとう、梓さん」

「いーえ」

ついさっきまで考えていた相手からの思いがけない電話。

あまりのタイミングの良さにコナンは驚く。

それでも、少なからずそれを待ち望んでいたのも事実でコナンは笑
顔で梓から受話器を受取った。

1・夏の終わり（後書き）

初めまして。 緋咲焰です。

コナン君と平次君の關係が好きなので、私が書くお話のほぼ全部に2人が出る予定です。

好敵手でもあり、親友でもある2人の關係って素敵ですよ。

これから、そんな2人（+α）の友情を書いていけたらいいなあと思います。

2・訪れはいつも突然

「平次兄ちゃん、久しぶり！」

「おー、工藤。ひさしぶりやな。演技しとるっちゅうことは、さっきの姉ちゃんまだ傍におるんか？」

まだ傍に梓がいたため、子供口調のまま電話に出ると状況を察した平次が電話の向こうで小さく笑う。

他の客への応対に戻っていく梓を笑顔で見送ると、コナンは小さく息を吐いて受話器を持ち直した。

「もう大丈夫だ。悪かったな、服部」

「何のことや？」

「携帯、通じなかっただろ？ 事務所に置いて来ちゃってさ」

「別に俺は構へんけど、携帯、ジブン以外の誰かに出られたら拙いんとちゃう？」

「今は事務所に誰もいないから平気だって。ここなら誰かが帰って来たらわかるし」

「ほなら、ええけど」

演じる必要の無い会話にさきほどまでの虚しさがコナンの中から消えていく。

本来の自分でいられる気楽さを改めて実感していた。

「で、本題は？」

平次のことだ。

何の理由も無く俺に電話をかけてくることはないだろう。

今回も事件絡みか、それとも大阪への誘いか。

「ああ、そうやった。俺、今事務所の前におんねん」
「は？」

コナンは告げられた言葉の意味を理解しきれず、数回瞬きを繰り返す。

そして錆びたロボットのようにながら音が聞こえそうなほど、ゆつくりと窓の外に視線を向けると白い歯を見せて笑顔を浮かべた平次が手を振っていた。

「声も出えへんほど、喜んでくれるなんてホンマに嬉しいわー」

「喜んでんじゃねー驚いてんだ！　どうしててめえはいつも連絡を後回しにしゃがる！」

「やって、思い立ったんが今朝やったし。別にええかなー、なんて」
「いいわけねーだろ、バーロ。こっちにも準備つてもんがあるんだよ」

「まあ、ええやん。あ、俺も何か頼んでええ？」

「人の話を聞け！」

「すんませーん」

『ポアロ』に入ってきた平次は悪気など微塵も感じていないだろう笑顔を浮かべてコナンの向かい側へと座る。

連絡無しでの訪問の常習犯はコナンの文句などお構い無しだ。

傍らのメニューを取って開くと、注文するべく手を上げた。

「あら、コナン君のお友達？」

傍までやってきた梓が平次とコナンを見比べて不思議そうに訊ねる。
まあ、当然の反応だろう。

小学生と高校生の組み合わせなんて、誰が見たって不自然だ。

肌の色の違いが無ければ兄弟と言う選択肢はあるだろうが。

「うん、さっきの電話のお兄ちゃん。近くまで来たから寄ったんだって」

「そうなの。あ、ごめんなさいね。ご注文は何になさいますか？」

「そやなーカレーとアイスコーヒーを頼むわ」

「かしこまりました。アイスコーヒーは食後でよろしいですか？」

「ああ」

「ではしばらくお待ち下さい」

梓は平次に対して一礼し、俺に対して小さく手を振ると去っていった。

コナンはソファに座りなおすと、向かいに座る平次を見る。

視線に気付いた平次は表情だけで、何だ？と返して寄越す。

コナンは笑って首を振ると目の前にあるお冷に手を伸ばした。

「そう言えば、和葉ちゃんは？」

「な、なんで、アイツの話になんねん」

よほどのことが無い限り、いつも2人一緒にいるのイメージある為何の気なしに聞いたただだったのだが。

彼女の名前に面白いくらいに反応する平次にコナンは思わず笑みを零す。

「お前、動揺し過ぎ」

「やかましいわ」

「ははは。で、今回は一緒じゃないのか？」

「・・・ホンマ、不本意やけど今回も一緒や。こっちの友人に会うとかで、東京駅で別れたけどな。少し遅くなる言ってたわ」

「そっか」

和葉が来ているのなら、蘭も喜ぶだろう。

嬉しそうに笑う蘭の顔を思い浮かべ、コナンは自然と笑顔になっていた。

「何や、嬉しそやな、工藤。大方、和葉も来てるなら姉ちゃんも喜ぶとか思てんのやろ」
「うるせ」

凶星だったが、反論すると墓穴を掘るのは確実。

一言だけ返すとコナンは赤くなってるだろう顔を隠すように横を向いた。

2・訪れはいつも突然（後書き）

少し遅くなりましたが第2話です。

お互いが協力して推理のやり取りをする2人も好きですが、2人の憎まれ口の応酬も楽しくて好きです。

『名探偵』と呼ばれ、常に大人達の中にいる彼等が年相応に見えるからかもしれません。

原作もアニメももう少し、平次君の出番が多くなるとうれしいんですけどね（笑）。

3・涼しげに、艶やかに

「まったく、何で女つてのは準備に時間がかかるんだ」

事務所の下の階段の前、啜っていた煙草を携帯の灰皿に押し付ける
と小五郎は大きくため息を吐いた。

そんな様子にコナンと平次は顔を見合わせて苦笑いを浮かべる。

本日、彼らはいつもと違う格好をしていた。

小五郎は紺の無地の浴衣に白の献上柄の帯、平次は黒地に淡く鳳凰
が描かれた浴衣にカラシの献上柄の帯、コナンは白地に灰色の流水
柄の浴衣に紫紺の帯とそれぞれが涼しげな浴衣姿をしていた。

上で未だ準備中の蘭と和葉、園子を含めた6人で花火大会に行くこ
とになり、園子が全員分の浴衣を用意してくれたのだ。

「ホンマ、女ちゅうんは難儀なモンやな」

「僕、喉渴いた…」

「まだかあゝ？」

彼是、コナン達は30分近く待たされていた。

夏も終わりが近付いているとは言え、まだまだ夜も暑い。

ジワリと滲む汗に3人は階段の上を力無く見上げて再び大きく息を
吐いた。

「……お待たせー」

さらに10分後、ようやく階段を降りてくる3人の声が聞こえてコ
ナン達は振り返る。

そして現れた彼女達の姿に思わず息を呑んだ。

蘭は退紅色に半身が黒地で牡丹、薔薇、菊の花々が描かれた浴衣に

藤黄色に白練色の花が織り込まれた帯を一文字結び。

和葉は黒地に似せ紫と二藍色の二色の大菊が染められた浴衣に深緋色から、銀鼠色を経て素鼠色へ変わるグラデーションに桜をイメージした小花が散りばめられた帯を貝の口結び。

園子は黒地に少し青みがかった白練色と牡丹色の百合の花が染められた浴衣に菖蒲色の献上柄の帯を蝶結び、とそれぞれが艶やかで大人っぽい雰囲気醸し出していた。

いつもとは全く違う彼女達の様子に男3人はただ呆然と見惚れていた。

「ねえ、お父さん、コナン君、おかしくない？」

「平次、どない？」

蘭と和葉がそれぞれコナン達に感想を求めるが。

言葉も無く見惚れている3人から返事は返って来ない。

「あら、やだ。男共が固まってるわ」

3人の様子に気付いた園子は呆れたように肩を竦める。

園子の言葉に蘭と和葉は顔を見合わせると嬉しそうな笑顔を浮べた。

「ほら、さっさと行くぞ」

程なくして我に返った小五郎が照れ隠しのようにぶつきら棒に告げた言葉を切欠にコナン達は花火大会が行われる提無津川の河川敷へ向かって歩き出す。

一番前を小五郎が、その後ろを蘭、和葉、園子が並び、一番後ろからコナンと平次が続いた。

提無津川へと近付くにしたがい、大勢の人の気配がざわめきと共に伝わって来る。

「楽しみだね」

「ドキドキするわぁ」

「何か、緊張してきた」

「ちっ、見えねえ」

河川敷へとたどり着き適当な場所へと陣取った6人は間もなく打ち上げられようとしている花火を見るべく空を見上げる。

しかし、コナンだけは周りの大人達の身体に阻まれて僅かな隙間からしか空を見ることが出来ずにいた。

そんな様子にいち早く気付いた平次がコナンの両脇に手を差し入れその身体を持ち上げる。

「わ、な、何だ？」

「ねーちゃんじゃなくてスマンな」

「るせ」

突然ふわりと浮いた身体に慌てたコナンだったが後ろから聞こえた平次の声に力を抜いた。

からかう言葉と共に意地悪く笑う平次にコナンは拗ねた様にそっぽを向く。

それを優しげな眼差しで平次は見下ろしていたが、ふいに周囲のざわめきが大きくなったのを感じ腕の中のコナンを抱えなおした。

間もなく、夜空に大輪の華が咲き始めようとしていた。

3・涼しげに、艶やかに（後書き）

お久しぶりです、緋咲です。

1年ぶりに続きを投稿しました。

しかも、今年の夏も既に終わりを迎えようとしていると言う失態（汗
遅筆な上に私生活の事情でなかなか定期的な更新は出来ませんが気
長にお付き合いくださると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5652c/>

真夏の夜の出会い

2010年10月28日08時09分発行